

## 私の細いみち

私は五歳から父に書を習った。一五歳のとき、自分は書家にしかなれないなと思った。書を志望するなら中国を知るべきだとして、大学へ入ることを強く勧めたのは父であった。

上京後、父には内証で、かねてからの作風に惚れ込んでいたT・K先生に師事すべくお宅へ伺った。ちょうどその日は稽古日であった。それは先生の作風からは想像もできないいかたちの指導ぶりだった。いっばしの書家気取りだった当時の私は、師につくことを断念した。

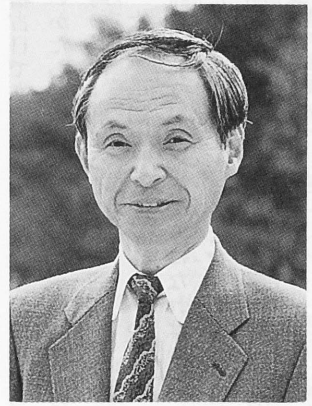
大学で中国のことを学ぶといっても、書作の素材にする漢詩や古典文が読めるようになればいい、ぐらいのつもりでいたのだが、師をとることを辞めた日をきっかけに、展覧会出品もやめて、とりあえず在学中は、古典の臨書と中国学に専念してみようと思った。

## 西林 昭一

幸いに、大学には敬愛できる老先生が多くおられたお陰で、授業のほとんどは真面目に出席した。加藤常賢先生の講義などにはすっかりかぶれ、湯島聖堂で研究者相手になさっていた『漢学ノ起源』の輪読会にも末席に居させてもらった。在学中はまた、剣道で汗を流した——剣道は一九八〇年春まで続けた——。

大学卒業後は、神田の正則商業高校に二年勤めた。が、剣道の師が当時の跡見学園理事長、飯野保先生と大学が同期というご縁で話があったらしく、国語の教員を探しているから受けてみるという嫌も応もない勧めで、縁あって跡見の中高に勤めることになった。

一九六五年の暮れごろであったか、当時、跡見短大の学監であられた伊藤嘉夫先生から、新設する大学に、高校芸術科



書道の資格も取得させることになるので、来年度から兼任してほしい、校長には話をつけてあるというお声がかかりがあった。

大学卒業後は松井如流に師事し、日展だけに焦点をしばって書作をつづけていたので、伊藤先生のお誘いは、自分がいち

ばんやりたいことに近い授業でもあり、ありがたうお受けすることにした。後年に知ったことだが、当時短大におられた藤田経世先生が、『跡見学園国語科紀要』に寄稿していた私の拙い論文に目を通されていて、伊藤先生に推挽して下さったそうである。

大学では、飯島総葉先生が仮名を担当しておられた。飯島先生は、戦前ずっと某宮家の御教育係りをされていたそうので、上品で古武士のようなお方であった。私は漢字の実習を担当したのだが、就任二年後だったか、伊藤嘉夫先生ご担当の『風姿花伝』の講義を肩代わりしろ——ということ、後年、浪本澤一先生にお引継ぎするまで、にわか勉強をしたこともあった。

一九七〇年には、大学の専任講師に採用された。一般教育に所属し、書道実技と書論を担当したが、七三年だったかに美学美術史学科に配置替えとなった。飯島総葉先生が亡くなられ、前田舜次郎氏が後任でこられた一九八二年から私は、書道実技の担当からはずれ、学科での概説・特講それに演習も担当することになり、またにわか勉強が増えた。それはまさしく『書経』にいわれる「教うるは学ぶの半ばなり」という状態で、学生には頼りない教員だったろうが、自分にとっては、苦しいながら、中国古代美術全般に目配りする機会を得て、楽しくもあった。

海外研究から帰国したところから、白い紙にむかう書作の間は次第に少なくなり、原稿用紙に対する時間が増えていまいに至っている。

跡見生活の三八年間で、もっとも充実していたのは、海外研究で数々の名品に向きあっていた日々であった。苦しかったのは、教職員組合委員長としての一年間であった。これまでの間、自分でも持てあます狷介な性格のため、同仁諸彦とは親しく交流を得られず、また学生諸君ともゆったりと話しあうこともできなかった。つねづね何とか融けこみたいと思いつながら、自分の殻に閉じこもってきてしまった。自分では気づかないところで、いろんな方に不愉快な思いをおかけしたことであろう。ご寛恕下さい。

## 略歴

昭和七年 和歌山市で出生

昭和二十六、二十七年 和歌山県美術展・書道部門特選

昭和二十七年 毎日書道展入賞

昭和二十八年 和歌山県展無鑑査（以後、東京へ出たため不出品）

昭和二十八年 大東文化大学文政学部中国文学科入学（昭和三十三年卒業）

昭和三十四年四月 跡見学園中学高等学校教諭（昭和四十五年に至る）

昭和三十四年 日展初入選（五科・書）、以後六回入選

昭和三十六年 大東文化大学東洋研究所学外研究員（昭和四十八年に至る）

昭和三十六年 日本中国学会会員

昭和四十一年 跡見学園女子大学兼任講師

昭和四十二年 大東文化大学非常勤講師

昭和四十二年 美学协会会员

昭和四十八年 跡見学園女子大学美学美術史学科助教授

昭和五十三年 同教授

昭和五十五年 海外研究——台湾・国立故宫博物院・国立中

央図書館——（昭和五十五年八月～五十六年四月）

昭和五十七年 大東文化大学評議員（平成三年に至る）

昭和五十九年 毎日書道展審査会員（平成三年自主退会。書壇を離れる）

昭和六十二年 大東文化大学理事（平成三年に至る）

昭和六十二年 文部省教科用図書検定調査審議会——第六部会——委員および委員長（平成八年に至る）

平成二年 書学書道史学会理事（現在に至る）

平成七年 平成七年度・毎日書道顕章（学術部門）受賞

## 業績

〈単著〉

月儀帖三種（『書跡名品叢書刊』本）ほか八種 昭和四十四年～四十九年 二玄社

書譜（『中国古典新書』本）昭和四十七年 明德出版社

中国新出土の書 平成元年 二玄社

書の文化史（上） 平成三年 二玄社

ヴィジュアル書芸術全集・巻四 平成三年 雄山閣

翁方綱の書学——『蘇斎筆記』訳註——平成八年 柳原書店  
書の文化史（中） 平成九年 二玄社

〈責任編集〉

ヴィジュアル書芸術全集・一〇巻 平成三年～五年 雄山閣

〈編著〉

中国甘肅新出土木簡選 平成六年 毎日新聞社・(財)毎日

書道会

居延出土書法木簡選 平成八年 毎日新聞社・(財)毎日書

道会

〈監修〉

書のふるさと 昭和五十九年 清雅堂

書人小伝(『書学大系』研究篇) 昭和五十九年 同朋舎

中国の書——史蹟と博物館ガイド—— 平成元年 雄山閣

ガイド中国の書——石刻・遺跡・博物館—— 平成五年 柳

原書店

中国歴史博物館蔵法書大観(全一五巻)第一期五巻 平成六

年 柳原書店

書の道(ビデオ 一二巻) 平成七年 日本ビクター社

中国歴史博物館蔵法書大観(全一五巻)第二期五巻 平成九

年 柳原書店

書のシルクロード 平成九年 柳原書店

〈共編〉

歴代名家臨書集成 昭和六十三年 柳原書店

書道名言辞典 平成二年 東京書籍

書道基本用語辞典 平成三年 中教出版社

〈共著〉

王羲之・王献之(『書道芸術』巻三)ほか八種 昭和四十六

年～四十七年 中央公論社

中国書道史下巻 昭和四十七年 木耳社

中国墓誌精華 昭和五十年 中央公論社

書譜(『中国書論大系』巻二) 昭和五十二年 二玄社

統書譜(『中国書論大系』巻六) 昭和五十四年 二玄社

清の帖学派・碑学派(『中国の美術』巻二) 昭和五十七年

淡交社

墨跡・十七帖(『王羲之書蹟大系』解題篇) 昭和五十七年

東京美術

顔真卿の字と書法(『顔真卿書蹟集成』解題) 昭和六十年

東京美術

書学捷要(『中国書論大系』巻一四) 昭和六十一年 二玄社

『中国書道全集』巻二ほか五種 昭和六十一年～六十二年

平凡社

集字聖教序(『中国法書ガイド』本)ほか一六種 昭和六十二

年～平成二年 二玄社

ヴィジュアル書芸術全集・文房具 巻一〇 平成五年 雄山

閣

〈論文(主なもの)〉

争坐位稿に関する一考察（『跡見学園国語科紀要』⑨）ほか七

種 昭和三十六年〜四十四年

包世臣の書学——気満について——『東洋研究』⑧ 昭和

三十九年 大東文化大学東洋研究所

康有為の書論 『東洋研究』⑩ 昭和四十四年 大東文化大

学東洋研究所

孫過庭の思考のかたち 『跡見学園女子大学紀要』5 昭和

四十七年

刻本書譜とその周辺 『東洋研究』32 昭和四十八年 大東

文化大学東洋研究所

鍍金緑松石象嵌獣形盒試探 『跡見学園女子大学美学美術史

学科報』6 昭和五十三年

刻符 『不非兆止』①ほか九種 昭和五十三年〜五十九年

不非兆止刊行会

許阿瞿画像石とその題記 『中国学論集』 昭和五十九年

大東文化学園

宋高宗書孝経馬和之絵図初探 『中田勇次郎先生頌寿記念東洋

芸林論叢』 昭和六十年 平凡社

新出土の書とその周辺 『大東文化大学書道研究』① 平成

五年 大東文化学園

肥致碑試探 『書学書道史研究』③ 平成五年 書学書道史

学会

〈項目執筆〉

書道辞典 昭和五十年 東京堂

世界美術辞典 昭和六十年 新潮社